

特集

ウロダイナミックス所見 —OAB治療効果予測に使えるか?—

松川宜久

名古屋大学大学院医学系研究科泌尿器科学

Key Words 尿流動態検査, 排尿筋過活動, 難治性過活動膀胱, 予測因子

- 尿流動態検査は過活動膀胱（OAB）の診断・治療には必須の検査ではないが、重症例、治療抵抗例ではその評価のために有用な検査である。
- 尿流動態検査における排尿筋過活動（膀胱不随意収縮）は、OAB重症度に関連するだけでなく、その改善がOAB治療成功につながると考えられる。
- 治療抵抗性OABを予測する治療前の尿流動態的所見として、わずかな排尿筋過活動により尿失禁がみられる症例、蓄尿早期の排尿筋過活動出現症例、排尿筋低活動合併症例が挙げられる。

はじめに

過活動膀胱（overactive bladder；OAB）は、疾患概念が症状症候群であることから、その診断、治療の評価は問診や過活動膀胱症状スコア（overactive bladder symptom score；OABSS）などの自覚症状質問票に基づいて行われることが多く、いわゆる難治性OABの診断も患者の主観評価に頼るところが大きい。もちろん、それ自体は間違いではないが、治療の適切な評価や正しい

治療選択のためにも、泌尿器科専門医であれば、尿流動態検査（ウロダイナミックス）による他覚所見の評価も行うことが望ましいと思われる。本稿では、尿流動態学的側面から難治性OAB（薬物治療抵抗性）に関連する因子について検討を行いたい。

OAB治療における 有効性の評価方法

OABに対する治療効果を評価するための標準化

Yoshihisa Matsukawa（講師）